

なぜ泣いているのか

(イザヤ書 65:17~19)

(ヨハネによる福音書第20章 11~18節)

私たちの救い主イエスは十字架の上で死んでしまいました。血を流しながら呻き声をあげながら、苦しみの果てに息を引き取ったのです。そして、すべてが終わったようでした。イエス様を「十字架につける」と叫んだ民衆の声も、騒ぎも終わりました。主イエスに従っていた弟子たちも、自分が捕まえるのを恐れ、身を隠して、すべてが静まるのを、待っていました。

ある人は、数々の奇跡を行うこの方こそ、イスラエルをローマの束縛から解放してくださるのに違いない、と信じていたのに、虚しく死んでしまったのをみながら、挫折と失望に苦しんでいました。そして、ある人は、もう、すべては終わったと、一時の夢から目覚めたかのように、もとの日常に戻ろうとしました。主イエスを愛し、死ぬことがあっても決してイエス様から離れないと言っていたペトロさえすべてを諦めて漁師に戻り、海で魚を取っていました。もうイエス様は死んでしまったのだから。

主イエスは確かに死にました。十字架の上で死んでしまったのです。大勢の人が苦しみながら死んでいく主イエスの姿を目ではっきりみしました。弟子たちも主を愛していた婦人たちも見ていました。イエス様の死は誰も否定することができない事実でありました。

主イエスは葬られ、墓の中に入れられ、今は大きな石で塞がれて、お墓の中で冷たい死体になっているのです。パレスティナの蒸し暑い気候は死体をすぐ腐敗させ、悪臭を放すのです。

今日朗読しました聖書の前の部分を読むと、「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。」と書かれています。愛する方の最後の姿でもみたい、そして、腐敗する体に香料を塗りたい、いろいろな思いで眠れない夜を過ごしたかもしれません。待っていたかのように、まだ暗い道を急いでイエス様の墓に向かった一人の女の人の姿があります。彼女について、ルカによる福音書では(8:2)「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア」と書いています。

七つという数字はユダヤにおいて完全数、その上無い数字を表現する時に使います。数えきれないほどの悪霊に苦しまれていた、彼女の状態、彼女の人生がどのようなものであったのかが分かります。ある人は娼婦であった、ある人は聖書に書かれている罪深い女がそのマリアであったとも言いますが、同一人物であるのかは分かりませんが、マグダラのマリアが数えきれないほどの悪霊に左右され、人間らしさを失った悲惨な状態、希望がない、ただ生きるだけの人生であったのかは想像できるものであります。呪われた人生でした。

そのような彼女が主イエスに出会いました。そして、悪霊から解放され、人間らしく生きる人生になったのです。人のために、主のために、光のうちを歩む者になったのです。主の前で喜びにあふれた彼女を想像できるものです。彼女にとって主イエスは命であり、希望でした。 そうなのに、主が亡くなってしまったのです。彼女はすべてを失ったような気持ちになったのでしょうか。これからわたしはどのように生きればよいのだろう。そのような気持であったのかもしれませんが。

それで、眠れない夜を過ごし、日が開けるのを待たずに、亡くなったイエス様にでも会いたいという気持ちで、足を急いだかもしれません。

行ってみると、墓から石が取りのけてあるのを見て、弟子たちに告げます。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」

それで、二人の弟子は来て、イエス様を包んでいた覆いはあるのに、主はおられない、それを信じな

がらも、イエス様の復活を理解することができませんでした。そして、この弟子たちは家に帰って行った、と聖書は記しています。諦めたかのように帰ってしまったようです。

しかし、マリアは帰ることなく、いや帰ることができなくて、墓の外に立って泣いていました。悲しみと驚き、戸惑い、どうしようもできない、絶望の涙です。しかし、主に対する思いを諦めることができないマリアは泣きました。泣きながら身をかがめて墓の中を見ました。すると、その空になっている墓の中で、彼女は白い衣を着た天使から言われます。「婦人よ、なぜ泣いているのか」。マリアは言います。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」

そのようなマリアに甦られたイエス様は言われます。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」。主は、なぜ、泣いているのか、だれを、捜しているのか。私は生きている、なぜ死んだものを捜し、悲しんでいるのか、と問うておられるのです。

わたしたちは目の前のことに捕えられ、失望し、悲しみ、苦しんで泣きます。試練と問題の中で、どうしようもできないので泣きます。私の限界、力を越えた出来事の前で泣きます。泣くしかないのです。そして、その涙で主が目のおられるのに、見えないのです。

イエス様が、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」、「先生」といいました。呼んでくださる主のみ声でやっと気づきました。あまりの嬉しさですがりつこうとするマリアにイエス様は言われます。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。

人間の思いを超えた信仰的な世界を悟らせてくださいます。もう人間のことを思わないで、朽ちることがない、神様のことを思いなさい。マリアに新しい世界を知らせてくださいます。

そして、マリアに使命が与えられます。「わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」 マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えました。

七つの悪霊に捕らわれていたマリアは、イエス様の復活の最初の目撃者であり、復活の証人になったのです。

すべてを失ったような危機も、試練も、彼女にとって祝福になりました。主は彼女を捨てたりはしないのです。死さえも祝福に変えられたのです。

なぜ、泣いているのでしょうか。主は生きておられます。

なぜ、泣いているのでしょうか。だれを、何を捜し求めているのでしょうか。主は生きておられ、私に最善の道を開いてくださいます。死が目の前にあっても、すべてが終わったような絶望の中でも、泣かないでください。主は言われます。なぜ泣いているのか、私は生きている。私はあなたと共にいる。私はここにいるのではないか、と言われます。

コリントの信徒への手紙 15 章 13, 14 節で、使徒パウロはこのように言います。

「死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずで。そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」

主は死から甦られました。その主を信じるわたしたちは、主のみ手によって新しくされるのです。もはや、泣く声、叫ぶ声は、再び響くことがないのです。

主の復活の日、泣くのをやめて、喜び、踊りましょう。私たちのために十字架で死んでくださった主は生きておられます。主によって、私たちはすべてに打ち勝つことができるのです。